

第 3 回 (上)

『教科書には出てこない江戸時代 ～将軍・武士たちの実像～』

山本博文、東京書籍、2008年

第3回は、東京大学大学院情報学環教授、そして史料編纂所の教授で、専門が日本近世史である山本博文先生の『教科書には出てこない江戸時代～将軍・武士たちの実像～』を取り上げます。

山本先生は1992年に毛利家の江戸留守居役の活動をえがいた『江戸お留守居役の日記 寛永期の萩藩邸』（読売新聞社）で、日本エッセイスト・クラブ賞を受賞されました。また、1995年に出版した『鎖国と海禁の時代』（校倉書房）では、従来の「鎖国令」の定説をくつがえした、と言われます。他にも『参勤交代』（講談社現代新書）、『大江戸サラリーマン学 武士の生き方に学ぶ!』（PHP研究所）、『歴史をつかむ技法』（新潮新書）、『日本史の一級史料』（光文社新書）など、専門的なものから読みやすい一般向けのものまで、多数の本を書いております。

この『教科書には出てこない江戸時代～将軍・武士たちの実像～』は、将軍や大奥の女性たちの暮らしを紹介し、武士道とは何かといったことなども書かれています。

誤解されている「参勤交代」

今回取り上げたいのは、『教科書には出てこない江戸時代～将軍・武士たちの実像～』のなかから「参勤交代」についての部分なんです。

どうして取り上げたいかという、少なくない人が参勤交代の目的を誤解しているからなんです。どんな誤解でしょうか？

では、尋ねます。参勤交代の目的は何でしょうか？

「えっ、大名の経済力を削ぐため、つまり大名を窮乏化させるために決まっているじゃない」と答えた方は、残念ながら、正解ではありません。

実は、生徒に聞いても、ほとんどが「大名窮乏化」説に対して<YES>と答えています。

「じゃ、なぜそう思うの？」と突っ込むと

「中学（または小学校）で、そう習った」と断言するのです。

これはおかしいですね。だって、日本史の教員のなかでは、参勤交代の目的は「大名窮乏化」でないことは、もうかなり昔から「常識」になっているのですから。

「えっ、常識っていつから？」と聞かれそうなので、**東京大学の入試問題**でみておきましょう。**1983年度の第3問**で次のような出題がありました。

参勤交代が、大名の財政に大きな負担となり、その軍事力を低下させる役割を果たしたこと、反面、都市や交通が発展する一因となったことは、しばしば指摘される場所である。しかし、これは、参勤交代の制度がもたらした結果であって、この制度が設けられた理由とは考えられない。どうして幕府は、この制度を設けたのか。戦国末期以来の政治や社会の動きを念頭において、150字（句読点も1字に数える）以内で説明せよ。

1983年ですから、今から33年も前の問題なんですが、参勤交代の目的は「大名窮乏化」にあったのではなく、あくまでも「結果であって、この制度が設けられた理由とは考えられない」とはっきりと否定しています。30年以上も前ですよ。

小学校の先生は他教科も教えなければならないから、自分が教わった内容を今でも正しいと信じこんで子どもたちに教えていることはわかります。事実、私も何十年も前に、参勤交代の目的は「大名窮乏化」にあると教えられましたから。でも、中学校の社会科の先生だったら、参勤交代の目的は「大名窮乏化」でないことは知っていなければおかしいと思います。

ということで、参勤交代について簡潔にまとめてある良書なので、『教科書には出てこない江戸時代～将軍・武士たちの実像～』を使って、「参勤交代」について学んでいきま

しょう。ただ、山本先生の著書にはそのものズバリの『参勤交代』（講談社現代新書）があります。ところどころ、この本からも紹介させていただきます。

世界史的に見て特徴的な制度

ところで、大名が領国と江戸を1年交替で往復する参勤交代の制度について、山本先生は次のように指摘されています。

江戸幕府を封建制度と考えた場合、「参勤交代」は世界史的に見て特徴的な制度となる。封建制度は、分権性を本質としているので、最大の封建領主である徳川氏のもとに、すべての封建領主（大名）が参勤するというのは異質だからである。

しかし、例えばフランスの絶対王政期を考えてみれば、領主としての本質を持つ貴族は、大領主である公爵も含めて王の宮廷に集まっており、似たような体制を持っていたことに気づく。つまり、江戸時代を西洋中世の封建制度類似の制度だと考えることに誤りがあるのである。

この参勤交代という制度は、いまだに大名の経済力を削ぐために行われたというような理解がなされることがあり、文化面での評価も低いように見うけられる。ここでは、参勤交代制度の本質を考えていこう。

江戸時代は封建制社会だから、それぞれの領国を統治している大名が、将軍に会うためにわざわざ江戸まで行くと言うことは「不自然」で西欧の封建制社会ではありえない、ということなんですね。

先に進みましょう。

「参勤」と「参観」

はじめに、参勤という文字の説明から始まります。

「参勤」の「きん」には2つの書き方がある。1つは、「勤」の字、もう一つは「観」という字で、ともに「きん」と読む。

「観」は「まみえる」という意味で、本来はこちらが正しい。「参観」というのは、基本的に、ある一人の武将が他の武将に会いに行くことを言った。会いに行くのは、服属するという態度を示すことで、当時の言葉で言えば、「御礼」である。御礼は権力者の御前

に出て挨拶することで、この行為が相手に従うという証になる。

「参観」という文字は見慣れない文字ですが、もともとはこちらが正しいということです。「観」は「まみえる」つまり「拝謁する」という意味で、大名たちが江戸幕府将軍に拝謁するために、江戸まで出て行くことであり、日本中の大名が交互に江戸まで来ることが「交代」でした。「参観」という文字が「参勤」になるのは、1年おきに江戸に参府するのが大名たちの「勤め」になっていたから「参勤」という文字に変わっていったんでしょう。

参勤は江戸時代特有のもののように思われているが、秀吉の時代にも参観の原型があった。例えば、家康は小牧・長久手の戦いで秀吉に一時勝利するが、政治的な圧力を受け、結局、秀吉に観（まみ）えに大坂まで行かなければならなかった。家康は戦闘で秀吉に負けたわけではないので、その後独自の地位を築くが、わざわざ自分の領地を出て大坂まで行き、秀吉の前で「御礼」をする、つまり、徳川家が豊臣家に従うという儀礼を尽くすことが必要だったのである。

当時は、この「御礼」という行為が非常に重視されていた。例えば、秀吉は明に兵を送ったが、この時の理由を、朝鮮国王に秀吉の元に御礼に来るように要求したのに、御礼に来なかったからだとしている。これは国内でも同じで、後北条氏を攻めるときには、後北条がやはり上洛して来ないというので攻めていく。つまり自分に従うと言う確認を形に表す行為が参観であった。

諸大名が「率先」して参勤していた

では、参勤交代という制度はいつから始まったのでしょうか？

「えっ、寛永12（1635）年に3代将軍徳川家光が決めたのと違うんですか？」という声が聞こえてきそうですが、それは「武家諸法度（いわゆる寛永令）」で明記された、あるいは制度化されたということです。

武家諸法度（寛永令）で大名に命じられた内容は、西国の大名が三月末から四月のはじめにかけて江戸に参府すると、江戸にいた東国大名が暇を与えられて国元に帰り、次の年の三月末から四月にかけて東国大名が江戸に来ると、西国大名に暇が与えられる、ということでした。

実は1635年に制度化される前から、各大名は江戸に行っており、参勤をしていました。

すでに実態としてあるものを明文化したということなんです。

江戸幕府が行った参勤交代の原形は、家康のライバル豊臣秀吉が諸大名を京都や伏見に集め、屋敷を与えたことに始まります。秀吉は大名妻子の在京、家臣とその妻子の城下への集住を命じています。その後、豊臣政権を受けついで徳川家康は、伏見城で政務を執りますが、諸大名には伏見参勤とともに、江戸参勤を要請しています。江戸幕府が大名の妻子を江戸に住ませよう強制したのも、秀吉の政策を踏襲したものと言えるでしょう。

では、徳川氏への参勤交代は、いつ始まったのでしょうか？

それは、大名がその親族を江戸に差し出すという動きから始まりました。

慶長元年（1596）に藤堂高虎は9歳の弟正高を差し出しました。藤堂高虎と言えば、伊予国今治藩主で後に伊勢津藩の初代藩主となった人物です。宇和島城（現存十二天守の1つ）・今治城・篠山城・津城・伊賀上野城・膳所城などを築き、築城の名人として知られていますね。

そして秀吉の死（慶長3年、1598年）後、一挙にその数が増えます。慶長4年（1599）には堀秀治が子の利重を、浅野長政が末子長重を江戸に送り、翌5年には細川忠興が三男忠利を差し出しました。浅野長政は豊臣政権では五奉行の筆頭でした。細川忠興の妻は細川ガラシャで明智光秀の娘でしたね。これらは大名たちの自主的な人質提出の動きでした。

逆に、半強制的に人質提出を迫られたのが加賀前田家です。慶長4年、前田利家の死後、後を継いだ利長は前田家謀反の噂を恐れ、前田家を残すために母の芳春院を江戸に差し出します。芳春院はNHKの大河ドラマ『利家とまつ』の主人公、加賀前田100万石を作ったと言われた女性で、前田利家の妻のまつのことです。

関ヶ原の戦いの後は、この動きが全国の大名に拡大されていきます。豊臣政権五大老の一人で、関ヶ原の合戦では西軍の総大将だった毛利輝元も慶長6年（1601）9月に7歳の嫡子秀就を人質として江戸に差し出します。

まだ江戸が徳川家の城下町に過ぎなかったその頃、江戸に来た大名は、大きな寺院や譜代大名の屋敷などに宿泊しました。幕府は彼らの便宜を図るため、江戸に邸地を与えます。邸地をもらうということは、「また来年おいで」ということを意味します。大名たちは自分たちが暮らす屋敷を作り、一定期間そこで生活をしなければならないということになります。将軍に会って挨拶をし、将軍に「帰って良いよ」と言われるまで、江戸で暮らすことになるんですね。そして、時代に乗り遅れないようにするため、江戸に「挨拶」に行く大名は増えていきました。

慶長20年（1615）大坂夏の陣で豊臣家が滅亡すると、諸大名は競って江戸に参勤するようになります。大名の江戸屋敷も整備されていき、**それまで国元で暮らしていた大名の妻子も江戸に来るように要請されました。**

このことを山本先生は次のようにまとめています。

この参勤は、幕府が強制して始まったのではなく、むしろ大名たちの方から率先して江戸に赴くという自然発生的なものだった。彼らは、自分は徳川の味方だと言うことを積極的に示すために江戸に参府したのだ。徳川家としても、大名が自然発生的に江戸に来てくれるのはありがたいので、大名が来れば大いに歓待して、江戸市中に屋敷地を与えた。

このような状況が起こるのは、関ヶ原の戦い以降のことである。その頃家康は、大名が江戸に出て来ると、最初は譜代の大名の屋敷に泊め、帰るときに屋敷を建設する敷地を与えた。あるいは、屋敷建設のために資金を融通することもあった。こうして江戸には諸大名の屋敷が建ち並ぶようになった。

各大名が徳川家康個人に対して行っていた忠誠の証として始まっていた参勤が、幕府の制度として行われていくようになったのが家光の頃からなんです。

そして、最初の頃の参勤（「挨拶」「御礼」）は、家康を「恐れる」大名あるいは家康を「慕う」大名たちが自発的に行っていたのですが、多くの大名がこれをするようになると、他の大名たちもそうしなくてはならない雰囲気が出てきて、「このままではヤバイ！バスに乗り遅れるな」ということで、大名全部が江戸に行って挨拶・御礼をするようになっていったんですね。

ちなみに、**参勤交代が始まった当初は全ての大名ではなく、外様大名が対象でした。**それが、1642年に親藩や譜代大名にも江戸参勤が義務づけられるようになりました。以後、諸大名は原則として1年間は江戸に在府し、その翌年は国元にいるという生活を送るようになります。

では、質問です。**大名の中で、参勤交代しなくてもよい者もいました。それはどんな大名でしょうか？** ヒントは譜代大名です。

譜代大名のうち、老中などの役職に就くものは、江戸城内の御殿に登城して国政を担当しますので、「在職中」は国元に戻るわけにはいきません。当然ながら、参勤交代の対象外となりました。